

# 仏教エスペラント運動の歴史と現在

山口真一

〔教心寺住職〕

## 一 エスペラントとは

エスペラント (Esperanto) は、一八八七年にユダヤ系ポーランド人 (当時は帝政ロシア領) のザメンホフ (Zamenhof) によつて発表された国際語案Ⅱ計画言語である。

国際語といえは、今日ではほとんどの人が英語をもつて国際語であると思つてゐるふしがある。しかし、英語は民族語である。特定の民族文化を背景として持つ言語は中立であるべき国際語としてはふさわしくない。本稿の趣旨は「英語Ⅱ国際語」論への反論ではないので詳しい言及を避けるが、これはほとんどのエスペランチスト (esperantisto、エスペラント使用者) の基本的立場である。

## 二 ザメンホフの宗教観

ザメンホフはユダヤ系であつたが、熱心なユダヤ教徒ではなかつた。一時はシオニズムに心引かれたようだが、後には反シオニズムの立場をとつた。彼は一貫して、偏狭な民族主義 (ショーヴィニズム) を批判

し、民族対等の土台の上に人類の友愛を願つてやまなかつた。

ザメンホフによれば、人間同士の対立を生む直接の動機は言語の違いと宗教の違いである。前者の解決手段としてエスペラントが提案されたとすれば、後者に対しては「中立な宗教」という構想があつた。われわれ日本人にはかなり奇妙に思われるだろうが、ザメンホフのこの構想においては、ユダヤ教・キリスト教・イスラム教が同一の神を信仰しているにも関わらず預言者をめぐる解釈の違いから相互に対立していることが問題であつて、彼がいう「中立」とは、解釈の違いを棚上げすることに他ならない。これはザメンホフの限界であつたが、仏教など異なるタイプの宗教 (神をもたない宗教) は視野には入つていなかった。

この中立宗教の構想は、当初「ヒレリズム」(Hilismo) と称された。ヒレル (Hil) とは、紀元前一世紀頃のユダヤ学者で、律法の人道主義的解釈につとめ、「自分が欲しないことを他人になすなかれ」をもつて唯一のユダヤ律法とした。この名称はあまりにもユダヤ的であり、他宗教への配慮のゆえに、後には「人類人主義」(homarantismo、ホマラニスモ) と改称されるようになる。一九一三年に発表された「人類人主義の宣言」では、全部で一〇項目の綱領が述べられているが、そのうちの冒頭部だけ紹介すると、以下のようである。

ARENA



2010

一 私は人間である。私は全人類を一つの家族とみなす。私は、人類が互いに敵対する様々な人種や民族宗教の集団に分裂しているのは最大の不幸の一つであり、この事態は遅かれ早かれ消滅しなければならず、その消滅をできるだけ促進するのが私の義務と考える。

二 私は、すべての人は人間に他ならないとみなし、すべての人をその個人的価値と行為によつてのみ評価する。自分とは異なる民族・言語・宗教・社会階層に属しているという理由で、人間を虐待・抑圧するのは野蛮行為だと考える。

ただし、この人類人主義は歴史的にはエスペランチストの多くの中心理念として受容はされてきたが、公式にはあくまでも個人的な価値観、政治的宗教的信条の域を超えるものではなかった。すなわち人類人主義を受け入れなくともエスペランチストでありえるのであつて、人類人主義とエスペラント自体の価値理念とは混同されてはならない。

### 三 仏教とエスペラントとの理念的関連

仏教エスペラント運動というとき、その「運動」とはどういうことなのか。ひじょうに単純にいえば、「エスペラントによつて仏教を広め、仏教者にエスペラントへの理解を求める活動」である。これを「運動」と称しているが、英語やフランス語などの民族語による仏教普及運動は「仏教英語（仏語）運動」とも「英語（仏語）仏教運動」とも呼んだりしない。その違いはどこにあるのか。

言語というものをひとつの道具あるいは手段と見る限り、それによつて伝達されるメッセージの方が大切なのであつて、それをいかなる言語で表現伝達するかは二次的な問題、したがつてなるべく効率のよい（つまり普及の割合が高い）英語を選ぼうとするのはごく自然な態度である。エスペラントを使って世界に仏教を広めようとするのはきわめて効率の悪い、そして極端に言えば無駄な努力ということになるだろう。な

ぜならば、エスペラントしか解さない人は世界にはいないのだから。

しかしながら、言語は単なるコミュニケーションの手段に留まらない。社会や文化との密接な関わりにおいて存在するのである。したがつて、エスペラントにも文化があり、その使用者の形成する共同体がある。それは必ずしも協会とか連合のような明確な組織形態を指すのではなく、ある価値理念の下にゆるやかにまとまった言語共同体である。その価値理念とは、以下の三点に集約されよう。

一 民族的な価値観・文化の違いを尊重する

二 国家、民族、宗教、階級などの枠組みをこえて連帯する

三 エスペランチスト共同体全体としては特定の宗教・政治的見解から中立である（むろん個人として中立ではありえないし、特定の見解を持ち活動するグループを作ることは自由である）

このような価値理念は仏教のそれと相似の関係にあるといえないだろうか。仏教はまずなによりも世界宗教・普遍宗教であつて、特定民族の救済を説くものではない。また、寛容の精神でもって相手を摂受し、いかなる名目による戦いも認めない。民族、国家、階級、政治的立場等々を「世間虚仮」として相対化してきたのである。

「世間虚仮」は聖徳太子の言と伝えられているが、これは「唯仏是真」と一對をなす標語である。世俗を相対化することは同時に、仏法を唯一の規範とすることを意味する。そこで仏教者にとつてめざすべき社会は、娑婆と対極にある浄土、もしくは浄土をモデルとしてイメージされるところの、自由で平等なコミュニティとなる。

念のために言っておきたいのだが、仏教がめざすのは個人的な安心救済にとどまるものではない。仏教では智慧と慈悲の二つを強調するが、慈悲は正に他者に向かうものであるから、社会のありようは仏教者にとつて関心事にならざるをえないのである。

個々人ないし個々のグループの差異がもたらす対立を解消するために、差異そのものが相対化される（どうでもよいこととされる、こだわ



る必要のないこととされる) 必要がある。仏教は当初からそのことを言い続けてきた。エスペラントが目指す民族平等・人類友愛の精神は、仏教的価値観とひじょうに親和性が高いといえる。

ただ、宗教あるいは仏法とエスペラントのような言語を同一レベルで論じることには抵抗を感じる方もおられるかもしれない。宗教とは「究極的関心」(ポール・ティリッヒ) であるが、言語は人間生活の上で究極ではありえない、というような反発は予想される。しかしながら、現実の社会の中で、言語の持つ重みは宗教の持つそれと比較して、どちらが大切かという問題の立て方はできないと考える。むしろ、宗教が真に「究極的関心」であるならば、宗教者にとって、言語問題を含む社会のありようが信仰や信心の課題とならざるをえないであろう。そのような課題を担わない宗教は観念の遊戯である。

#### 四 仏教エスペラント運動の歴史

この運動は、元来がその性格上国際的なものであって、日本と外国と分けることは適当ではないであろうが、ここでは日本の動きを中心とし

やまぐち・しんいち◎一九五九年生まれ。信州大学文学部卒。東海専修学院(同朋大学別科)修了。真宗大谷派教心寺住職。真宗大谷派名古屋教区教化委員。国際仏教エスペラント連盟事務局長・日本仏教エスペラント連盟理事長・名古屋エスペラントセンター委員長  
 仏教関連の著書: *Enkondiko en Budhismo* (エスペラント書き「仏教入門」) *Fabeloj el la Budhismo Literatura* (渡辺愛子著「仏典童話」のエスペラント訳) *Uebpsauro* URL: <http://www.nagoya30.net/template/kyosin/sin-it/>

エスペラントは、一八歳の時、大学のサークルで勉強を始めた。哲学的意味での世界観としては唯物弁証法に立つ。ただし人間の問題を解決するには宗教が必要と考える。(写真は二〇〇七年に横浜で開催された世界エスペラント大会の「宗教フォーラム」において講演する筆者)

て三つの時代区分を設けて概要を述べることにしたい。

#### 1 草創期(一九三一年)

日本仏教エスペラント連盟(Japana Budhana Ligo Esperantista、以下JBLEと略称)の創立が一九三一年であるので、それ以前の動きを草創期として見ておくことにする。

日本の仏教者ではじめてエスペラントを学習したのは、確実な史料による限りは、龍谷大学の中井玄道教授で、一九〇四年、留学先のアメリカで英文の学習書を手して学んだと伝えられる。翌一九〇五年には、東大の高楠順次郎博士も独習によりエスペラントをマスターした。日本のエスペラント界自体に組織的な運動がなかった時代で、この時期エスペラントを学んだといえ、知識人階層における独習が主だったのである。中井氏の場合は、エスペラントでの著述や翻訳もなく、組織的な活動にも参加した形跡がないので、積極的な仏教エスペラントとは評価しにくいかも知れないが、JBLEの創立大会が、中井氏が当時館長をつとめていた仏教児童博物館を会場として開かれた事実、また後の龍谷大エスペラント会の会長(名目的なもの)をつとめたことからすれば、陰ながら援助者の役割を果たしたと思われる。しかし高楠博士はかなり積極的であったことは、一九〇六年に日本エスペラント協会が設立された時の発起人の一人であったことから伺われる。

いまひとり、仏教学者でも僧侶でもないが、浅井恵倫氏(大阪外大教授)をあげなくてはならない。浅井氏は真宗大谷派の寺院の出身であり、一九二二年、日本エスペラント学会(日本エスペラント協会の前身)の機関誌「*La Revuo Orienta*」(『東洋評論』)に「百喻経」をエスペラント抄訳し発表している。これは確認できる限り、世界で最初に翻訳された仏教経典である。なお、翌二三年には「白骨の御文」の訳も掲載された。これを嚆矢として、さまざまな人の手で歎異抄や阿弥陀経などが次々に「*La Revuo Orienta*」誌上で翻訳発表され、一九三〇年には「仏教

特集」が組まれたこともあった。

仏教者としての組織的なエスペラント運動は、一九二一年一月、大谷大学での初等講習会に始まる。講師は、当時は三高の学生であったが後の京大教授の桜田一郎氏、世話人は細川憲寿氏（後に大谷大学学監）、受講者は百人を超えていたようである。そのわずか三ヶ月後には「大谷大学エスペラント会」が設立されると同時に、機関誌「*La Paaco*」（『平和』）が刊行され始めた。これが世界で初めての仏教エスペラントのグループであり、仏教エスペラント文献でもある。その設立メンバーは多く、JBLEの中心部隊となっていたのである。中でも太宰不二丸氏（後に大谷大学図書館長）はJBLEの第二代理事長として活躍された。

一方、龍谷大学においても一九二二年同様の初等講習が開かれ、やはり三高学生の八木日出雄氏（後の岡山大学長、世界エスペラント協会会長「一九六二〜六四」）が講師をつとめた。中心メンバーとしては瓜生津隆雄氏（後に龍谷大教授）など。機関誌は一九二五年より創刊された「*La Sankara Tilio*」（『聖菩提樹』）。この時代は学生の間でエスペラントブームのような感があり、東京、名古屋、京都ではそれぞれ「学生エスペラント連盟」が結成されていた。したがって、京都において谷大・龍大にエスペラント会が生まれたのも、偶然ではなく、時代の波にのっていたというべきであろう。いずれにしても、この両大学のエスペラント会がJBLEの支えとなっていたことは事実であり、双方の機関誌では次々に訳経が発表され、また「仏教用語辞典」の編纂のために協力体制をとることもなされた。ただこの計画は途中で挫折し、編纂のためのカード類はどこかに失われてしまった。

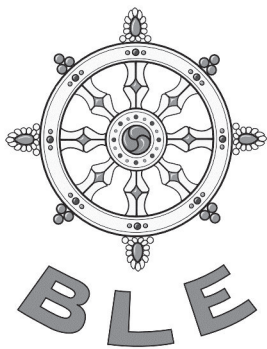
以上とは別の系統になるが、九州に興った「仏教済世軍」（真田増丸師の主管する信仰団体）は仏教伝道にエスペラントを採用し、中西義雄・豊島竜象両氏を中心となって一九二五年四月「仏教済世軍エスペラント号」を出し、八月までに五号を重ねた。中西氏はまた盲人上田順三

氏と共に点字済世軍エスペラント欄を出している。さらに中西・豊島両氏は同年十月から雑誌「*La Lumo Scibar*」（『無礙光』）を発刊した。

時代はやや遡るが、一九二〇年に東京の秋山文陽氏により、自ら主宰する上宮教会の成人講座において、宗教哲学や自然科学の諸講座とならびエスペラント科が設けられ（以後エスペラント科は独立して「中央エスペラント学院」と称する）、三ヶ月の講習が連続して十回にわたって開催され、のべ五百人の講習生を養成した。第四回講習に先立って行われた宣伝講演会（中央仏教会館）では、秋山氏が直接、大正大学、立正大学、駒沢大学、天台宗大学、豊山大学、東洋大学へと働きかけ、受講者を大学が派遣するように要請した。その甲斐あって、東洋大学の四十八名をはじめ、天台宗大学からは学長自身が聴講に来たようである。秋山氏自身は講師としてではなく宣伝組織者・主催者としてはたらく、日本のエスペラント運動史の中では無名の存在に近いが、柴山全慶氏（臨濟宗南禅寺派管長、JBLE初代理事長）は（秋山）氏の仏教への奉仕と信念とに動かされての崇高な心情は、今日吾々が聞いても胸の熱する思いがある。」と高く評価し、その思い出を数頁にわたって記している。

## 2 日本仏教エスペラント連盟（一九三二〜三七年）

一九三〇年の一二月、柴山全慶氏はイギリスの Geo Yoxon というエスペラントリストから手紙を受け取り、大谷大エスペラント会の「*La Paaco*」についての問い合わせを受け、あわせて世界的な仏教エスペラントリストの会を組織したいという相談を受けた。柴山氏自身は一九二五年ごろにエスペラントを独習しており、一九三〇年七月に「十牛図」のエスペラント訳を出し、それが第一回汎太平洋仏青大会（一九三〇年ハワイにて）の参加者に贈られた縁により、海外に名が知られたのであるが、この手紙に対しては「時期尚早であろう」との返事を出した。しかし、イギリスではすでに「仏教徒エスペラントリスト連盟」(*Budhana Ligo*)



2001年再建されたBLEのシンボルマーク  
法輪といわれる、8本の輻をもつ輪は全仏教  
共通のシンボル

JBLE結成に向けての準備と平行して、高倉会館では高倉仏青の主催でエスペラントの展覧会および初等講習が開かれた（講習生五十三名）。高倉仏青のエスペラント支持は、その会員に大谷大エスペラント会員の出身者がいたからでもあるが、その結果として「高倉エスペラント会」が生ま

れ、その余波は「臨済宗大学（後の花園大学）エスペラント会」も生み出すにいたった。

準備会においては、発起人らにより次の方針が確認された。

- (1) 各宗派的色彩を超越して、全仏教徒としての立場を失わないこと。
- (2) 月一回会合を催し年四回の小冊子を刊行すること。
- (3) BLEの名のもとに各種の仏教エスペラント運動をなすこと。
- (4) 国内仏教エスペラント運動の中心となり、英国のBLEと連絡をとること。

こうしてJBLEは十月に、仏教児童文化博物館において結成大会を開き、四十名の参加者が全国各地から集った。

主な活動としては、高倉会館での講習会のほか、機関誌“La Lumo Oriens”（『東洋の光』）の発刊（年四回）、ニュースレターの随時発刊、年一回の日本エスペラント大会の番組のひとつとして仏教分科会の開催、経典の翻訳および刊行などで、約百名の会員を数えた。世界的にみると、この当時エスペラントによる宗教雑誌はキリスト教系が四種出されていたが、仏教系は皆無であったのに、BLEによる“La Buddhismo”とJBLEの“La Lumo Oriens”の二種が出ることにより、エスペラント界における仏教の認知度を高めるのに貢献したといえよう。出版分野でも、一九三七年までに五点の仏教文献を刊行し、他にもJBLE会員による自費出版や日本エスペラント学会からの刊行物として五点、計十本の出版が六、七年の間になされたということは、わずか百名の組織としてはたいへんに健闘したわけである。なおこの中には、暁烏敏の『日本精神』が含まれているが、時代を反映していると言うべきか。そして時代の流れはしだいにエスペラントのような文化的運動には不利になつていく。

JBLEは新興佛青やプロレタリアエスペラント運動とちがつて直接の弾圧を受けたわけではないが、紙の価格高騰や印刷所の閉鎖は大きな

Epemantusa、以下BLEと略称）が一九二五年に創立されており、英文の仏教誌“The Buddhism in England”の中にエスペラントの頁を設け寄稿者となつていた。もつとも「連盟」とはいふものの、組織的な実体として確立していたわけではなく、ラトヴィアに協力者がいるにすぎなかったらしい。Yoxon氏の意図はBLE会員を日本に拡大することにより世界規模での連盟を創ることにあつたと思われる。BLEは一九三一年三月に自前の機関誌“La Buddhismo”（『仏教』）を出し始めるが、それに先立ち、中外日報社の「エス語の仏教連盟」と題する記事（一九三一年二月一六日）が青年層の仏教徒エスペラントを刺激し、太宰不二丸氏は『中外日報』にエスペラントに関する論文を寄稿し、Yoxon、柴山、太宰の間の通信が始まつた。

このような経過にしたがつて、JBLE結成に向けた準備会が五月に東本願寺高倉会館にて開かれ、柴山、太宰ら九名が参加した。また翌月には第二回の準備会が大谷派京都教務所で開かれたが、この間の動きを『中外日報』は逐一報告している。『中外日報』の関心の高さは、記者の小谷徳水氏が、かつて京都でエスペラントの講習を受け、熱心な支持者であつたことによる。

ダメージであった。<sup>1)</sup> Informilio<sup>2)</sup> (ニュースレター) 第二十三号 (一九三七年八月) には次の声明が載っている。

「時代は急角度に転回して欧州大戦後世界を風靡した国際親善の思潮は次第に消え去り、国家と国家・民族と民族・思想と思想がげげしく相克するありさまとなった。この人類にとつての不幸がいかなる樹根から生じているかについては様々の意見があるであろうが、しかし眼前の事実は一時『文化』の諸意圖を顧みている余裕のない、いわゆる非常時の状態であること一つである。かかる時代に文化の一役割であるエス語運動が花やかでないのは当然の成行きである。吾々は、前述のような相克が解消して再び人々が『文化』を顧みる落ち着いた生活を持つ日まで、あらゆる困難と戦つて定められた目的に進んできた道ではあるが、一時積極的な行事は中止して退いて自己の余力をたくわえることにしたいと思う。仏教エス語運動史の上に少なからぬ足跡を記してきたのをせめてものよろこびとして、しばらく隠退しよう。世界は動く。やがて遠からず『文化』に恵まれる日があるであろう。その日こそ更に手を取り合つて人類のために自分たちの使命に奉仕しよう。」

### 3 戦後の運動 (一九四六年)

戦後いち早く仏教エスペラント運動の再建にとりかかったのは、ドイツ及びスウェーデンの仏教徒で、その二つが統合し、機関誌『Danno』(『法』)が一九四六年から刊行されるとともに、エスペラント雑誌を通じてBLEへの再結集を呼びかけた。この呼びかけに応じて数名が連絡をBLEと持ちはじめ、「中外日報」や「本願寺新報」(西本願寺)にも呼びかけが掲載された。しかしBLEは組織体としては強固なものではなく、ボランティアが機関誌を発行し購読者を募る、という程度のものでしかなかった。そして当のボランティアが高齢化したり死去すれば、また次のボランティアが現われ、新しい機関誌を発行する、という繰り返しであった。一九八六年には、当時のBLE会長が機関誌発

行を停止し、正式に解散声明を出したわけではなかったが、事実上の消滅に至った。

これに対し、日本ではどうか。正式にBLEが再建されたのは一九五一年、名古屋で開かれた第三十八回日本エスペラント大会の仏教分科会の席上で八名が参加して決議した。そしてこの年から、BLEとJBLEの動きを伝えるニュースレターが毎月出され、翌年からはBLEの機関誌『A Budha Lumo』年四回のうち、二回をJBLEの担当発行とすることになった。これは、当時日本から海外送金が困難であり、日本からは年四回の発行が負担であったためである。ニュースレターの方はその後「JBLE月報」と改称され、『A Budha Lumo』の共同発行が停止された後は独自の機関誌『A Japana Budhano』(『日本の仏教者』)を出し始め、二〇〇九年一二月で三四九号を数えるに至った。

約半世紀の間、日本の仏教エスペラント運動は、良くいえば安定、悪くいえば停滞状態を続けてきた。出版活動はわりあい盛んで、『仏教聖典』のエスペラント版を一九八四年に出したことが特筆される。この『仏教聖典』とは、仏教伝道協会が編集刊行した經典のアンソロジーで、世界各国語に翻訳されている。現在、日本語以外に四十四の言語で刊行され、エスペラント版はそのうちの十三番目である。

しかしながら、日本の社会が経済成長を続け、海外との通信交流が飛躍的に伸びるなかで、英語の(疑似)国際語としての独占的地位がますます強固になるいっぽう、エスペラント運動自体が停滞をはじめ。この現象は日本に限らず、欧米でも同様に見られる。この原因を分析解明するには筆者は力不足であるが、現代の人々は、社会主義の崩壊によつて理想を求めることに空しさを感じてしまったように思われる。かつて理想を求めた人々は、エスペラントこそが理想の国際語であると考えた。今や、理想は関係なく、英語ができることが現実に必要とされ、現実の荒波の中では理想はますます片隅に追いやられていかざるをえない

のではないか。

#### 四 仏教エスペラント運動の現在と今後の課題

仏教エスペラント運動もまた、全体的には退潮傾向にあることは否めない。

しかしながら、仏教自体はかつてとはくらべものにならないほど世界的に布教が進んでいる。特に欧米では、かつては仏教といえば知識人を主として、神秘主義的に、または哲学的に受容されてきたのだが、今やさまざまな宗派・教団が伸長している。世界的にはテラワード仏教、チベット仏教、禅仏教の三者が特に勢いがある。仏教が衰退しているのは、日本や韓国で、これはおそらく、自らの地位に安住して教義を研鑽したり布教・教化を怠ってきた報いであろう。

そんな中で、BLEすなわち国際仏教エスペラント連盟が二〇〇一年に三たび再建された。再建を提唱したのは中国の仏教徒で、これに对应して筆者が数人に呼びかけて連絡をとり始めた。幸いなことに、インター



ブラジルで開催されたBLE再建総会

ネットという道具があり、メンバーリストが作られ、その中で再建の段取りから新しい組織の規約案や役員候補まで、直接顔を合わせることなく決められていった。正式には、二〇〇一年八月、ブラジルのフォルタレーザで開かれた世界エスペラント大会中に、仏教分科会が持たれ、これが同時に再建総会となった。役員は八名。ヨーロッパ二名、北米二名、南米二名、日本二名、という内訳である。また所属宗派も、テラ

ワード仏教、浄土真宗、チベット仏教、法華、禪と多様で、BLEは小規模ながら、超地域・超宗派の組織となった。なお、委員長はスウェーデンのテラワード仏教徒、事務局長には筆者が就任した。

エスペラント運動は現在でも、アジア・アフリカよりもヨーロッパで盛んなのは否めない。残念なことに、仏教徒が多い東南アジア、特にタイ・スリランカ・ミャンマーでは、エスペラントがほとんどいない。ベトナムや中国では、エスペラント運動はわりあい盛んであるが、これらの国では仏教徒エスペラントは自由に外国へ行けるだけの経済力を持ち合わせていない。

今後の展望でいえば、中国が仏教エスペラント運動のカギを握っていると思われる。中国は実はエスペラント運動大国である。文化大革命による仏教破壊（文化財や建築物のことではなく、信仰の伝統が破壊されたこと）の傷は完全に癒えたとはいえないが、徐々に人々は仏教を求めつつある。庶民の間ではまだ呪術的側面（現世利益）が期待されているに過ぎず、教学研究や教化活動はまだしもの観があるにせよ。実際に、国の単位で仏教エスペラント運動の組織があるのは、現在は日本だけであるが、中国では組織づくりがなされようとしている最中である。今後は日中の交流がはかれることになるだろう。

今後の課題としては以下の四点があげられよう。

一 過去約九〇年の間に翻訳された経典はかなりの点数にのぼる。あるものは単行本で、あるものは雑誌で発表されているが、大多数は散逸しかけており、それらをすべて蒐集し、テキストデータベース化をすすめる、何時でも誰にでも利用できるかたちにしていく。

二 それらの成果の上に立ち、不十分な翻訳をあらためるとともに、未翻訳の経典の翻訳をすすめていく。なお、翻訳につきまとう用語上の問題は、現在完全に解決されているわけではなく、基本的な語彙についてさえ、不統一がみられる。しかし本格的な仏教用語辞典の完成を待つてから翻訳にかかるのではなく、翻訳をすすめるなか

で用語の問題は解決されると考えねばならない。ただ、質的に満足  
の行く翻訳を出すためには、翻訳者に求められる条件として、仏教  
に関する理解があることはもちろん、サンスクリット・パーリ語・  
チベット語・仏典漢語のいずれかが読め、エスペラントを完全に習  
得していることが必要である。それらの条件を満たしている者はど  
れだけいるか、となると、世界で一〇人を超えることはないだろ  
う。いずれにしても、これは何十年ではなく何百年という長期的展  
望での作業となる。

三 インターネットを利用しての交流は定着したが、顔をつきあわせ  
ての交流はまだ世界エスペラント大会に限られている。訪問団を組  
織する、あるいは講演旅行を企画するなど、新しいかたちを探らね  
ばならない。

四 エスペラント運動外の仏教組織との交流。仏教界にはいくつかの  
国際的組織がある。例えば、世界仏教徒連盟(WFB)、あるいは  
「行動する仏教者国際ネットワーク」(INEB)。WFBは既存宗  
派の連合体の上部組織であり、BLEがこれと関係する可能性はう  
すい。しかしINEBは理念的にも共通しているので、言語の問題  
がクリアできれば、提携できるかもしれない(INEBの公用語は  
英語)。

## 五 まとめ

仏教界もご多分に洩れず、英語がはばをきかせている時代である。仏  
教学者も布教師も英語ができなければ世界的に通用しない。英語を道具  
だとして割り切ることも必要かも知れない。しかし……英語全盛期はこ  
こ一〇〇年から二〇〇年の間のことである。仏教は二五〇〇年の歴史を  
有し、かつての共通語はパーリ語や漢語であった。今後どうなるか、誰  
にも予想はできない。

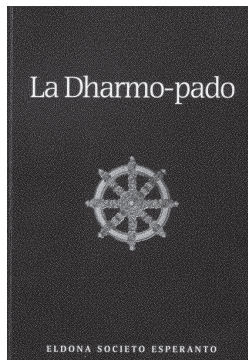
いつぼう、日本の仏教界では、未だに漢語依存である。日本の仏教者  
で言語問題に注目している人は数少ない。現代日本語で儀式を執行する  
ことさえ困難である。法事などで僧侶が日本語で経文を読むと、「勉強  
させられてみたい、ちつともありがたくない」と檀家がクレームをつ  
けるのが現状であつてみれば、ましてエスペラントが仏教界で広く用い  
られるようになる時代は、あるいは見果てぬ夢かも知れない。

しかし、BLEという組織があり、そのメンバーはエスペラントで交  
流し、他国の仏教の実情を知ったり、意見交換をしたり、友情を結んだ  
りしているのは、厳然たる事実である。宗派間の教義の違いおよび言語  
の違いを乗り越えることは、意味のないことではない。

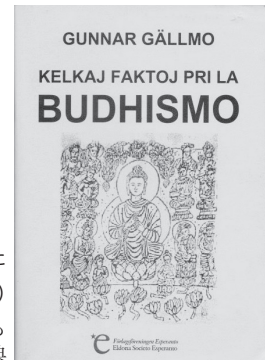


仏教エスペラント運動年表

年	月	日本国内	外国
1887	7月		ザメンホフがエスペラント第一書を発表
1904			中井玄道（龍大教授）が留学先のアメリカでエスペラントを学習
1905	8月		フランスのプロローニュ・スル・メールで第一回世界エスペラント大会
		高楠順次郎（東大教授）がエスペラントを学習	
1906	6月	日本エスペラント協会設立。発起人の一人に高楠博士	
1921		“Perloj el la Orienta”中に仏陀生誕について記す（日本で最初の仏教エス文献）	
1920		秋山文葉が東京の上宮教会で成人講座の一科目としてエスペラントを教える	
	11月	谷大にて初等講習。終了後「大谷大学エスペラント会」創立	
1922	2月	谷大エス会機関誌 La Paco 創刊（以後1936年まで15号を刊行）	
		日本エスペラント学会機関誌にて「百喻経」の抄訳掲載。（翌年には「白骨の御文章」訳を掲載）	
	5月	龍大にて初等講習。終了後「龍谷大学エスペラント会」創立	
1925		東亜仏教大会にて「仏教教義を英独仏及びエスペラントによって世界に宣布する必要」について提案あり。	仏教徒エスペラント連盟（BLE）創立。発起人はイギリスのマーチ、ラトヴィアのグローラ。英文の仏教雑誌の中にエスペラントのページを設ける。
	4月	仏教済世軍（真田増丸）による「エスペラント号」創刊	
	10月	龍大エス会機関誌 La Sankta Tilio 創刊	
1928		英文「南禅寺小史」を南昌世がエス訳出版	
1930		柴山全慶が「十牛図」をエス訳出版	
1931	3月		イギリスのゲオ・ヨクソンにより BLE 機関誌 “La Budhismo” 創刊
	10月	日本仏教徒エスペランティスト連盟（JBLE）創立 → 発起人に柴山全慶、太宰不二丸、真田昇連師ら。初代理事長 柴山全慶	
	12月	JBLE 機関誌 La Lumo Orienta 創刊	
1932	5月	日本エスペラント学会より「阿弥陀経」エス訳出版 → 以後「観音経」「正信偈」「仏陀伝」等を出版	
1933		新興仏教青年同盟にエスペラント語部	
1934	4月	臨済宗大学エスペラント会機関誌 La Voĉo 創刊	
		竹内藤吉「仏教述語辞典」出版	
1935	7月	日本エスペラント学会機関誌 “La Revuo Orienta” が仏教特集を組む	
1936			“La Budhismo” 終刊
1937	3月	“La Lumo Orienta” 終刊号 (1937年より戦時体制の下で活動困難となり、個人的な翻訳等は別として組織的な動きはとどえる)	
～この間、第二次世界大戦により、エスペラント運動時代が暗黒の時代			
1948			スウェーデンのルドルフ・ペトリらが仏教エスペラント連盟（BLE）再建。機関誌 “Darmo” 発刊



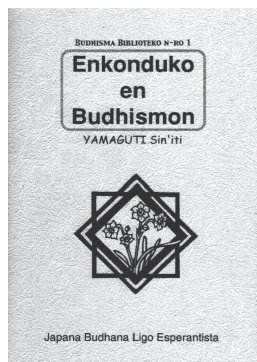
同じくグンナが著した「仏教についての諸事実」



スウェーデンのグンナ・ゲルモが翻訳した「ダンマバダ」（法句経）法句経は世界でもっとも読まれている仏教経典

年	月	日本国内	外国
1951	8月		第36回世界エスペラント大会（ミュンヘン）にて仏教分科会
	9月	日本仏教徒エスペランチスト連盟（JBLE）再建 第二代理事長 太宰不二丸	
1952		“JBLE Informilo”を発刊 編集長浅野三智。以後1987年にいたるまでの35年間、ほとんど独力で221号を出しつづける。	BLE 機関誌（“Budha Lumo”と改称）をイギリスと日本で交互発行
	8月		第44回世界エスペラント大会（ワルシャワ）仏教分科会 33名参加
1956			Nyanasatta 著“La koro de budhismo”（仏教の心髄）刊行
1962			ベルギーのプーリイが BLE の後継機関誌“Budhana Kuriero”を創刊
1965	8月	第50回世界エスペラント大会（東京）にて仏教分科会 33名参加	
1967		JBLE 機関誌名称を“La Japana Budhano”と改称	
1971		池田弘訳「般若心経」刊行	
1973			ベトナムのアヌルツダ訳による「法句経」刊行
1979		「柴山全慶エスペラント文集」を刊行	
1980		第三代理事長 三輪義明	
1984	7月	日本仏教伝道協会の『仏教聖典』エスペラント版刊行	
1986		第四代理事長 脇坂智証	
1986			活動者不足・会長高齢化により BLE 解散
1987	8月		第72回世界エスペラント大会（ワルシャワ）仏教分科会 36名参加
		JBLE 編集長 儀部晶之助に。以後1997年までの10年間に通常の機関誌以外に、臨時増刊号として16冊を出すなど精力的出版活動	
1990	11月	第五代理事長 佐村隆英	
1998	7月	JBLE 編集長 山口真一に	
2000	10月	JBLE ホームページ開設	
2002	2月	山口真一「仏教入門」“Enkonduko en budhismo”刊行	Gunnar Gällmo 訳“La Dharmo-pado”「法句経」刊行 Gunnar Gällmo“Kelkaj faktoj pri la budhismo”刊行
	8月		第77回世界エスペラント大会（フォルタレザ）仏教分科会（参加者40名）にて BLE 再建。委員長に Gunnar Gällmo 他7名の幹部を選出。 (世界エスペラント大会仏教分科会は以後毎年開催)
	9月	“Fabeloj el la budhisma literaturo”（渡辺愛子原著、山口真一訳）を刊行	
	11月		BLE 機関誌“La Esperanta Budhano”創刊
2003	1月	Budhana Festo を名古屋で開催。30名参加。以後、毎年公開集会として開催	
	8月	JBLE 新規約が発効	
	11月	第六代理事長 山口真一	
2004	8月		第79回世界エスペラント大会（北京）の戦略フォーラムにおいて、BLE の山口真一が仏教エスペラント運動について報告
2005	8月		BLE 幹部会改選

筆者が著したエスペラント書き  
「仏教入門」



BLE の年刊機関誌

